

道元禪師と引用天台典籍の研究

——特に正法眼藏坐禪儀について——

石 島 尚 雄

私は、先に、「正法眼藏の注釈に使用された天台用語は、天台学からみて、どの程度のものであるのか。……天台用語の使われ方の傾向はどうであるのか。」という問題提起をしたのであるが、今回は、『正法眼藏坐禪儀』の巻において、二三注目したい点があるの
で、考察したい。

問題の所在について

さて、『坐禪儀』において、禪師は、坐禪弁道に対する誤れる見解を次の様に批判している。

又一類の漢あり、「坐禪弁道はこれ初心晩学の要機なり、かならずしも仏祖の行履にあらず。行亦禪、坐亦禪、語黙動静体安然なり。ただいまの功夫のみにかかはることなかれ。臨済の余流と称するともがら、をほくこの見解なり。仏法の正命つたわれることをろそかなるによりて、恚麼道するなり。なにかこれ初心、いづれか初心にあらざる、初心いづれのところにかをく。³

右の部分には、直接天台用語は出ていない。しかし、『眼藏』最古の注釈書『正法眼藏抄』によると、天台学にとって重要な用語を使用して注釈していることを見出すのである。すなわち、この部分

を、注釈して次のように述べている。

意ノ止観、口ノ説黙、身ノ威儀ナムトタツ、身ノ威儀ニ付テ、常行、常坐、半行、半坐、三昧ト云、此行トハ心得マシ、コノ坐トハ心得マシ、仏行仏坐ハルカニコトナリ、事ニワタリテ分分アルナリ、証ヲトクニモ分証トテ、一分二分ワカツ、初地ヨリ十地マテモ、分分ノ証アルヘシ、コノ証ハ不可然也、³

と述べているのであるが、特に重要なのは、『摩訶止観』に説かれていた四種三昧における行・坐と心得てはいけないと主張している点である。そこで、坐について、意の止観・口の説黙・身の威儀を『摩訶止観』によってまとめてみると、

(一) 身には、常坐を開す。静室、空閑の地で、九十日を一期として結跏正坐す。

(二) 口の説黙とは、疲極したり、疾病に困しめられたら、一仏の名字を称え、慙愧し懺悔して、命をもって自ら帰すべし。

(三) 意の止観とは、端坐して正念す。繫縁はこれ止、一念はこれ観
1、一切の法みなこれ仏法なりと信ずれば、前なく後なくまた際畔なく、知者なく説者なし。2、もし知なく説なければ、無所住に住し、諸仏の住するように、寂滅の法界に安処す。3、この法界はまた菩提と名づけ、また不可思議の境界と名づけ、また般若と名づけ、また不生不滅と名づく。4、このように一切の法は法界とは二なく別ないと観する者は、如来の十号を観するものである（以下仮・中観は省略）。

となるのである。ここで、問題となるのは、何故に、臨済の余流を批判した禪師の原文に対し、詮慧が、右のような『摩訶止観』の内容を含みとした語句を使用して注釈を施したのかということなので

ある。

『眼蔵・御抄』と『止観』について

前節で、臨済の余流を批判している原文に『止観』をも批判しながら、詮慧が注釈していることに言及したのであるが、ここでは、詮慧が『止観』をも批判しているのであり、いわゆる天台家からの批判は、一つもないのである。

ところで、禪師は、坐禅を仏祖の行履と見なしているものであり、詮慧もその観点に立っていることが知られる。では、『止観』ではどうかというと、この部分は、明らかに、身口意の用心にとどまっている。というのは、身・口においては、身体的な用心であり、意においては、空寂中の三観を行なっているのである。

例えば、禪師は、「しるべし、学道のさだまれる参究には、坐禅弁道するなり。」と云い、詮慧は「仏行仏坐ハルカニコトナリ」と云うのに対し、『止観』では、「二に、四種三昧を勧進し、菩薩の位に入ること明かさんとしてこの止観を説くとは、それ妙位に登らんと欲せば、行にあらざんば階らず。よく解して鑽揺せば醍醐を獲つべし。」と、どこまでも、手段、用心の立場を貫くのである。

そこで、最初の問題に帰って、「天台学から見て、どの程度のものであるのか。」及び「天台用語の使われ方の傾向はどうであるのか。」に答える時期が、きたと思う。そこで、次に結論と今後の問題点を見出して、この小考を、おわりたいと思う。

結論及び今後に関する問題点

今までに、知られたことを箇条書きにすると、

道元禪師と引用天台典籍の研究(石 島)

(1) 禪師は、天台用語を使わずに、坐禅が仏祖の行履であることを説く。

(2) 詮慧は、天台用語をも使用して、さらに、仏行仏坐であることに明確にしている。

(3) 『止観』においては、教観における観の用心を知解せしむことに力をそそいでいる。

(4) 詮慧が、使用した天台用語は、『止観』本来の立場とは違う立場で、用いられていることが看守される。

(5) 天台学における四種三昧とは違うということを、詮慧が主張したのは、当時の比叡山の影響力を暗示させると共に、詮慧が天台学を知りながらも敢えて、異を称えていると思われるふしがある。以上、まとめたのであるが、今後、禪師及び詮慧の立場は、同じとしても、何故に詮慧は教学の用語をも使用して明確化するのであるか、という問題が依然として残るのである。また、その用語の性格は、天台教学の立場に拘束されないで使用されていることが知られるのであるが、『正法眼蔵抄』の全巻を通じて、そのことが言えるかどうかを、以後明らかにすることを期して終わりたい。

- 1 拙稿、『正法眼蔵抄』における天台用語の考察(『宗学研究』第二十四号、曹洞宗宗学研究所昭和五十七年三月、一三三頁—一三四頁)
- 2 道元、『正法眼蔵坐禅箴』(日本思想大系『道元』上二二八頁)
- 3 詮慧、『御聴書』(曹洞宗全書注解一『正法眼蔵抄坐禅箴』二二六頁下)
- 4 関口真大校注、『摩訶止観』上七三頁—七四頁参照。
- 5 道元、前掲書、一一八頁。
- 6 詮慧、前掲書、二六五頁下。
- 7 関口真大校注、前掲書、七二頁。

(駒沢大学大学院)